
闇夜が光にかわる時

樹 鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇夜が光にかわる時

【Nコード】

N9617I

【作者名】

樹 鈴

【あらすじ】

日常に魔法が当たり前にある世界、今戦いが始まる・・・

はじまりの夜（前書き）

オリジナルのストーリーに様々な作品をクロスさせた作品です。
まだまだ初心者なので拙い文だと思いますがどうぞよろしくお願い
します。

はじまりの夜

第1章 「黒の剣士」

十はじまりの夜十

ピピピピッ、ピピピピッ

目覚ましの音が部屋中に響きわたる。

俺は、布団に潜ったまま、その音の発信源を手探りで探し、スイッチを押して音を止める。

「ふあああゝ…」

俺は力一杯あくびをし、ムクリと布団から起き上がる。

そうそう、俺の名前は”橘 悠士”

この市川市にある高校、市川高校まんまだけどに通う2年生だ。

今はまだ5月だが、そろそろ進路を決めなきゃいけない時期だ。と言っても、やりたい事は特にないので、未だ進路希望の紙は綺麗な白紙である。

俺は顔を洗うべく、部屋を出て洗面所へ向かった。

俺の部屋は2階なので洗面所へは、階段を降りて茶の間を通る事になる。

俺は少しフラつきながら階段を降りてゆき、茶の間のドアを開けた。

茶の間に入ると、母さんが朝飯の準備をしていた。

「…おはよう…」

俺は元氣のない挨拶をした。

「おはよう…って、あんた、すごい眠そうね？」

母さんが、少し呆れ気味に言った。

「…うん…、ちょっと夜遅くまで起きすぎた…」

「…まったく…、ほら、朝ごはん出来るから早く顔洗っておいで」

「…あゝい…」

あくび混じりで返事をし、洗面所へ向かう。

深夜2時半過ぎまで漫画を読んでから寝たので、今日の起床時間（7…30）からして激しく眠い。

今なら立ったまま眠りに落ちそうだ。

顔を洗い、意識がはっきりしてきたところで、朝食を食べる。

今日のメニューは…、トーストに目玉焼き。
なんというか…普通。

一般的な朝食ってカンジ。

俺はさっさと たいらげて

部屋へと戻った。

部屋で制服に着替え、出発の準備をする。

ちなみにウチの高校はブレザーで、体育の時はジャージだ。

学校はそんなに遠くないので歩きで通学する。

道中、いつも俺の幼稚園時代からの幼馴染み、”瑞希みのり”を迎えに行く。

これは小学生の時からしているので、もはや日課である。

「えーと、今日の授業は…」

1時間目、数学。

2時間目、理科。

3時間目、地理。

4時間目、英語。

…朝から数学とは、頭が痛くなるな…。

みのりを迎えに行かなければならないので、そろそろ出発する事にした。

玄関へ行き、靴をはく。

そうしていると、母さんがやってきた。

「悠士、夕方から雨が降る予報だから、傘持って行きなさい」

そう言って、折り畳み傘を渡してきた。

「わかった、じゃあ行ってくるよ」

俺は傘を鞆にしまい、家を出た。

外に出て空を見上げると、曇りだった。

本当に夕方頃には雨が降りそうだな。

家から5分程度歩くと、みのりの家に着く。

俺はチャイムのボタンを押した。

すると、スピーカーから「はい」と声がでる。

この声は、みのりの母親の声だ。

「橘です」

「あ、悠士君ね。ちょっと待っててね」

5分ほど待つと、みのりが出てきた。

「おはよ、悠くん」

「おう、おはよ」

お互いに挨拶を交わし、俺達は歩きだした。

「そう言えば悠くん、今日の英語の宿題、ちゃんとやった？」

「…宿題？」

「うん。レッスン2の英文を和訳してくるっていう宿題」

俺は血の気が引いて行く感じがした。

「悠くん、もしかしてやってないの？」

「…ああ」

「どうするの？ あの先生、結構厳しいから、宿題出さなかったら評価下がっちゃうよ？」

「…そうだな。」

そこで みのり、頼みがある」

「なに？」

「宿題写させて」

「うーん、いいけど、その代わり、今日のお昼ご飯おごって」

「…く、背に腹は代えられないか…」

「やった〜♪」

くそう、俺のなけなしの小遣いが…

俺達は学校に着き、下駄箱に靴を入れ、教室に向かう。

俺と　みのりは同じクラスで、教室は2―Bだ。

教室に入ると、珍しい奴が俺の席の後ろに座っていた。てか寝ていた。しかも枕持参で。

こいつが親友もとい悪友の”宮地　俊一”である。

「おい、俊一」

俺は肩を叩いて起こした。

「…んあゝ・・・？」

「おはよう」

「ん〜？　何だ、悠士達か…。じゃ、おやすみ…」

再び枕に頭をうずめる俊一、てか枕とか・・・

「何だとは何だ。そして寝るな」

「今日、1時間目から来てるなんて珍しいね」

みのりが不思議そうな顔で言う。

「…ああ、数学の単位がギリなんだよ。だからとりあえず数学は睡眠学習する事にした」

「いや、ちゃんと受けろよ」

「だが断る！何が悲しゅうてワケわからん公式なんぞを覚えなきゃいけないんだ」

俊一…、何しにこの学校にきたんだ…。

「とりあえずオレは寝るから邪魔すんなよ？邪魔したら報復にお前のチャリのサドル、めっちゃ高くしてやるからな！！そして高い位置で怖い思いをするがいい！！」

それは報復というのか？

てか何で自転車のサドルなんだ・・・微妙な報復だな。

俊一は、そのまま眠りについた。

俺達は俊一の睡眠を邪魔しないよう、そっとしておく事にした。その方が静かだし。

俊一が安らかに眠る中（死んでるという意味ではないぞ）、1、2時間目は終了し、昼休みになった。

ちなみに、結局 俊一は最初から寝ていたので単位がもらえなかった

た事は秘密にしておく。

昼食は、弁当持参組と購買でパンを買う組に別れ、購買で済ませる人が大半である。

クラスの大半は学校の購買へ向かう事になるわけで、そこはもはや戦場のようだった。

その戦場に俺と、みのは混ざっていく。

「で、お前は何かいいんだ？」

俺は朝の約束通り、みのりの昼食をおごる事になった。

お財布の軽い俺にしてみれば、みのりのパン代だけでも大きな痛手だが、評価の低下を免れるためだと思えば我慢できるだろう……多分。

「…じゃあ、わたし、あれにするね」

みのりが選んだのは、あんパンだった。

安いものを選んでくれて助かった。

ちなみに俺のパンはクリームパンだ。

本当なら俺は弁当持ちなのだが、今日は母さんが用事があるらしく、弁当は無しになった。

さすがに年頃の男子の昼食がパン1つなのは、辛いものがある。

教室に戻ると、さっきまで爆睡していた進が起きて弁当を食っていた。

見ると、俊一の弁当はカレーだった。

「あれ、俊くん、なんでカレーなの？」

「みにより、ひよふ ひいへ ふへひゃ」

俊一は口一杯にカレーを頬張りながら答える。

「飲み込んでから喋れよ」

俊一はゴクリと飲み込んで再び語り始める。

「みのり、よく聞いてくれた。

毎日変わらない弁当に飽きたオレは、ある手段が閃いた。それがこの弁当だ」

「意味がわからんぞ」

「無能な悠士に教えてやろう。弁当箱にカレーは確かに入れないだろう。だが、そこをあえてカレーを入れるという逆転の発想によって斬新さが生まれる！

よって、日々の飽々とした弁当生活に光が差し込むのだ！」

斬新すぎてクラスで浮いてるぞ俊一。

まあ、その斬新さがある意味おもしろく見てて飽きないのは確かだが。

俊一は、残りのカレーをすぐに胃に収め、弁当箱を鞆にしまった。

そして教室はカレーの匂いに包まれていた。

俺はふと、教室のドアを見た。

ドアが開き、見知った女子が入ってくる。

黒く、綺麗な長い髪を揺らして こっちへ歩いてくるのは、俊一の幼馴染みで俺たちの友達である”平沢 結音”だ。

俊一の近所の”平沢神社”の娘でおとなしい印象を受ける。

「よう、平沢。なんか久しぶりじゃないか？」

俺は軽く挨拶する。

「こんにちわ、この頃図書委員の仕事が忙しくて。ところで、少しカレーのおいしい匂いがしますが・・・」

「ああ…、それはな…」

俺はそう言って俊一の方を見る。

そんな俺を見て、平沢は理解したという表情でクスッと笑って俊一を見る。。

「お弁当にカレーだなんて、ユニークですね」

「ユニークなのか？」

「ふふふ・・・ユニーク大王と呼んでくれ」

「じゃあユニーク俊くんだね」

「なんかプロレスラーのリングネームみたいだな」

そんなツツコミをすると俊一は少しバツの悪そうな顔をして「トイレに行く」と言い残して教室を出ていった。

「あ、橘さん、瑞希さん」

「ん？」

「なに？」

平沢は何かを思い出したらしい。

「今日の放課後、時間ありますか？」

「特に用事もないし、大丈夫だな」

「わたしも大丈夫だよ」

「よかった、実は今日、俊一さんの誕生日なんです」

「へえ、あいつ、今日が誕生日だったんだ」

「はい、それで放課後、俊一さんの家で誕生会でも開こうかと思っ
て」

「なるほど、でも俊一自身の予定とかは大丈夫なのか？」

「それは大丈夫です。今日はヒマな日だって朝言っていましたから」

「じゃあ放課後、みんなで俊くんの家に集合だね！」

「ええ、それじゃあ、また放課後 玄関でお待ちしてます」

「わかった」

「あと、俊一さんにはギリギリまで黙ってくださいね」

そう言って平沢は自分の教室に戻っていった。

ほんの少し経って、俊一がトイレから戻ってきた。

「結音、もう戻ったのか？」

「ああ」

「あいつ、何しに来たんだよ」

俊一は、よくわからないという表情で言った。

平沢に口止めされているので、適当に誤魔化すことにする。

「さあ？ ヒマだったんじゃないか？」

「そうか。どっちにしてもヒマだったかもな」

こんな流れで昼休みが終わり、3時間目が始まった。

4時間目の英語の宿題は、午前の授業中に、みのりのノートを写し

た（バレないようにアレンジを加えて）ので問題はなかった。

放課後になり、俺たちは掃除もなかったので、そのまま俊一、みりと一緒に玄関へ向かった。

進は下駄箱から自分の靴を取りだし、床に放り投げた。

「結音のやつ、おせえな…」

そう言って進は2階への階段を見る。

2年生の教室は2階で、3階は1年生、玄関のある1階は3年生の教室がある。

10分くらいすると、平沢がやって来た。

「ごめんなさい、待たせちゃいましたか？」

「かなり待ったぜ。例えるなら約束の時間から3時間ほど待たされた気分…」

「そんなに待ってないだろうが!!」

ポクッと俊一の額にチョップをかましてやる。

「うおー!!! イテー!!! 脳下垂体があああ!!!!」と意味不明なことを喚き散らす、そんな光景を見て結音はクスッと笑った。

「それじゃ、行きましようか」

俺たち4人は雑談をしながら帰り道を歩いた。

俺たちは見慣れた交差点までやって来た。

この交差点は商店街の一部で、人やら車やらで賑わっている。いつもは、ここで俊一と平沢と別れることになる。

俊一は、俺とみのりに「また明日な」と手をあげて言う。

「俺たち、今日は俊一の家寄ってくわ」

「は？　なんで？」

「私が誘ったんです」

平沢がちょっとテレた表情で言う。

俊一は意味不明と言ってるかのような目つきで平沢を見る。

「なんで平沢がオレんちに呼ぶんだよ？　呼ぶなら自分の家に呼べ」

「今日、俊一さんの家で誕生会をしようと思って」

「…オレの？」

「はい、俊一さんの誕生会です」

「そんな話聞いてねえぞ！」

「だって言ってますでしたし」

さらっとにこやかに一言で済まされ、俊一は納得できないという顔

つきになった。

そんな事はお構い無しに、平沢は俺たちを先導し、俊一の家へと向かった。

イベント事に限っては進んでみんなを引っ張る、こういう時の平沢の行動力は凄まじい。

俊一の家に着し、彼は玄関のドアを開けるためポケットから鍵を取り出す。

俺は、家の窓に明かりが灯っていない事に気付く。

「俊一、親は今日いないのか？」

「ああ、昨日からいないぜ」

そう言ってドアを開け、こちらに振り向く。

「なんか抽選で温泉旅行が当たったんだとさ」

「そうなのか」

「ああ、まったく気楽な親だよ」

俊一は呆れたように言い放ち、そのまま家へと入っていった。

一瞬、俊一の表情が寂しそうに見えた気がしたが、「早く入れよ」と言ってきたので、俺の思考はそこで止まってしまった。

あいつの事だから親が居なくて気楽だろうと思い、再び考える事なく、そのまま誕生日会が始まった。

今日は学校だったので何も準備できなかったが、近くのコンビニで適当に好きなものを買って、小さな宴会が開かれた。

これによって俺の財布は更に軽量化されたのは言うまでもない。今日だけで、とんでもない出費だ。

これからどうやって生きていこう・・・

俊一の誕生会（宴会）は夜8時くらいに終わった。俊一が買ってきた酒をみんなで飲んだのだが（バレないかな？）、俊一以外はほとんど飲んでおらず、一人だけ酔いつぶれて寝てしまったので、そこで解散となったのだ。

「それじゃ、橘さん、瑞希さん、また明日です」

俺たちは俊一の家玄関で別れた。と言っても平沢は俊一の家で待機するらしいが…。

外は既に雨が降っており、俺は鞆から傘を取り出した。どうやら雨が降る時間帯がズレたみたいだ。

「俊くん、大丈夫かな？」

「何が？」

俺たちは傘をさし、薄暗い夜道を歩いている。みのりは傘を持ってきていないので、2人で1つの傘を使う事になった。つまり相合い傘状態だ。

「明日学校だし、二日酔いとか大丈夫なのかなって」

「確かに心配だな。サボりの可能性もある」

「あゝ…、俊くんならあり得るね」

「てか、あいつ何しに学校来てるんだろうな？」

「そうだね、ズル休み多いもんね」

あいつが学校に来る時は基本、単位が危ない時、テストの日、体育のある日、ヒマな時である。

俊一の話をしているうちに、みのりの家に到着し、俺たちはここで別れた。

傘を満足に使えるようになったが、傘の中心をみのりに合わせていて、体の半分は既に濡れているので、あまり意味がなかった。

すっかり遅くなってしまった。

辺りは雨のせいもあり真っ暗だ。

俺は辺りを注意しながら歩いた。

人とぶつかったり、果ては電柱に衝突なんて事もあり得ない話ではないからな。

しばらく歩いていると雨の音にまぎって、異様な音…というよりも鳴き声みたいなのが聞こえた気がした。

「…なんだ…？」

俺はよく耳をすまして再度、辺りの音を聞き分ける。

「…グルルル…」

なんだ今の音は…？

犬の鳴き声か…？

そう思ったとき、ふいに声が聞こえた。

「…その民間人、伏せろ…！」

俺は、おもわず その言葉に従った。

伏せた俺の頭の上を、何かが通りすぎていった。

「…グオオオオ…！」

何だ、今の鳴き声は…！？

そう思い、俺は少し頭を上げ、謎の鳴き声のした方をみた。

そこには、本来あり得ないはずの物体（生き物）がいた。

「…な、な、な…！？」

「：下がっている、民間人」

俺が言葉を失っているときに、後ろから声がした。

俺は、今度は後ろを向き、さっきから民間人呼ばわりする人物を確認した。

俺は、この数分の間にあり得ないものを2つ、目に焼き付けてしまった。

ひとつは、犬のような姿をした、すごくデカイ化け物。どれくらいデカいかっていうと：軽トラックくらいの大きさ。犬にしてはあり得ないだろ、ふつう。

そして もうひとつ、俺の後ろに立つ人物。

黒いマントで身を覆った、ちょっとした変人。しかし問題はその変人ではなく、手に持っている剣だった。

その剣は紫色に輝いており、近くにいた俺は、剣から発せられる冷たい何かを感じていた。

不思議な剣を持つ男は、フツと目の前から消えた。

「貫け！！」

真上から聞こえた声に反応して、俺と化け物は上を見る。

俺と化け犬の頭上にいつの間にか飛んでいた変人の剣はより一層青く輝き、剣を横に払った。

それと同時に、太い針と化した無数の氷が化け物に降り注ぐ。そして細かい氷の欠片が俺に次から次へとぶつかってくる。

「いでででッ!？」

細かいとはいえ、ものすごい速さで飛んでくるので、何気に痛い。

着地した男は剣を構え、化け物に向かいながら俺に言う。

「下がっていないと痛い目にあうぞ」

すでに痛い目にあってるし。

すぐに、この異常な空間から逃れたかったのだが、情けないことに立つ事ができなかった。

「…まあいい。フィルベル。仕上げだ」

男は剣に呼びかけて化け物に向かって歩き出す。化け物は、さっきの攻撃により、動けずにいた。

化け物の身体には無数の氷が刺さり、足元は凍りついている。

男は化け物の前に立ち、何やらブツブツと言っている。

この距離じゃ、言葉は聞き取りにくい。

男が言い終わると、男と化け物の間に魔法陣のようなものが浮き出てきた。

その光景に俺は、言葉を失っていた。

魔法陣が輝くと共に、辺りは眩しくなり、思わず手で目のあたりを覆った。

気がつくのと、化け物の姿は消えていた。

……これは……夢だろうか……？

この現状が信じられずにいる俺を、男は見ていた。

「…な、なんだよ…？」

男に見つめられても嬉しいわけがない。

しかし、男は無言だった。

いつの間にか雨はやみ、月が見え隠れしている。

男はそのまま返事もせず、立ち去ろうとした。

「お、おい…！」

俺が男を引き止めた時、月の光が、振り向いた男の顔を照らし出した。

俺は、男の目を見て、言葉が途切れた。

顔立ちは整っており、美形なのだが、目は鋭く、睨まれただけで恐怖を感じる。

俺もその目で睨まれ、言葉を失ってしまっていた。

男は振り返り、闇に溶けていくかのように立ち去っていった。

「…いきたい…何なんだよ…」

俺は しばらく、この場を動く事ができなかった。

（ねえ一樹、さっきの人、能力者だったね。まだ覚醒はしていないようだったけど）

「あ・・・、だが俺が知った事か」

（でもでも、覚醒すれば同業者になるんだよ？ ちょっとは楽ができるじゃん？）

「……そんな事よりフィー。次に行くぞ……」

(ぶー……りょかい)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9617i/>

闇夜が光にかわる時

2010年10月10日16時28分発行